

第 2 回岩倉市自殺対策計画推進委員会 議事録

日時：平成30年10月19日（金）
午後 2 時～

場所：市役所 7 階 大会議室

1. あいさつ

（大藪委員長）前回の会議で子ども向けのアンケートの実施は難しいということでしたが、新聞やテレビの報道を見ても、子どもが命を落とすようなことも起こっています。先生方も一生懸命やっても起こってしまうということで、やはり相談窓口を増やすことが大事なのではないかと思いました。岩倉市の学校にはスクールカウンセラーや相談員が入っているので、そのような子どもの側に立って話を聞いている立場の方からヒアリングをしていただければと、事務局にお願いして調整していただいているところです。また、SNSも、国も力を入れていて、どこからでもアクセスできますので、それを広めていくことが大事です。いくら市民ふれ愛まつりでも、市の担当者から啓発をしていただけるということなので、少しずつでも取り組みが市民に広まっていくことが大事だと思います。この計画をより良いものにして、命を落とす人を少しでも減らしていければと考えています。

2. 議 題

(1) アンケート調査の結果と岩倉市の現状・課題について

【資料 2】こころの健康に関する市民意識調査報告書

【資料 3】「こころの健康に関する市民意識調査」結果からみる課題

【資料 4】岩倉市の自殺の状況

※ 資料に基づき事務局説明

委員長：今回の検討結果が計画の内容につながっていきますので、皆さまから意見を出していただければと思います。私からは、44ページの「自殺は本人の弱さから起こる」という質問について、年齢別の集計にかなり差があって、男性は「そう思う」が年齢が上がっていくと高くなっています。計画を立てて啓発していくときにターゲットを絞ることも必要かと思っています。

檜木委員：自殺を考えたことがある人の16.9%は、自分から見て高く感じます。うちは精神科の病院なので、来ている人の多くが死を意識されているが、アンケートは一般からランダムに選ばれた人が対象で、その中で16.9%、6人に1人くらいというのは高いと思います。また、自殺を考えたことがあった人がどれくらい本気だったかは、だいぶ差があると思います。今日にでもしようと思える人もいれば、うちに来ている人などは、夜寝て明日目が覚めなければいいのにとよく言われていて、そういう消極的な死を望む人はたくさんいます。72ページにも生きる支援とありますが、生

きる意味を感じられないから人生が終わってもいいと思っている人が大勢おられるから、そこら辺の対策が本質的なところなのかなと感じました。

櫻井委員：悩みやストレスを感じない人生はなくて、それを相談するとき、家族が一番身近な存在です。友人も大事ですが、今は家族がバラバラになっています。ひとり暮らし世帯やひとり暮らしの老人が増えて相談をしにくくなっているし、ゲームばかりで育っている子どもたちは、人付き合いも下手で友人も持てないし、そういう意味での提案をしていかないといけないのではと思いました。

委員長：アンケートを読むと、家族が悩みということもあります。昔は婦人会で集まって話したりしていましたが、そういった地域のつながりも考えることかと思います。友人関係も形が変わっていて、そのひとつがSNSであり、直接相對しない形でつながることで相談窓口にもなりうると思うので、幅広く取り組む必要があると思います。

渡邊委員：私の友人の話で、ご主人が亡くなられたときはまだお母さんが生きていたから大丈夫だったのですが、そのお母さんが亡くなって心がふさいでしまい、病院のカウンセリングを受けました。家にいてはだめだから心を外に向けようということで、市民サークルや講座に参加したり、一人で旅行に行ってみたりと前向きにやっていて、今はすごく明るくなっています。一緒に住んでいる家族が誰もいなくなって沈んで、おかしいと思って外に出て明るくなったので、友人などは大事かと思います。

委員長：外へ出ようというチャンスですね。きっかけはカウンセリングに行ったことで、今はまだ精神科やカウンセリングはハードルが高いということも聞くので、気軽に行けるということも伝えていく必要があると思います。

●●委員：今、地域のつながりがなくなってきていつので、地域でどうするかはとても大事だと思います。

委員長：アンケートをみると、自殺対策ではなく、そこに至るまでにいろんな相談があるのではないかと思います。岩倉市の状況はどうなっていますか。

河村委員：岩倉市の民児協は丁寧に地区割りが決まっていて、よそに比べれば住民との関わりが持てていると思います。今日の午前中にふれあい昼食会という集まりがあり、ある民生委員さんがこんな話をしていました。以前から、高齢の男性が飲酒しては近隣の赤ちゃんがいるお宅のピンポンを鳴らしたり自転車を蹴飛ばしたりしているらしく、今日も朝5時前に電話で起こされて、警察に連絡してパトカーが来たそうです。その男性はご夫婦2人世帯で、奥さんも困っているのですが、それを困っていると表現しないようです。お子さんもないので地域で支えようとしても、当の2人が拒否するので困るけれど、なんとかしないといけないと思っているそうです。岩倉市は高齢者2人世帯が多く、行政がいろいろ講座を開いても、だいたい決まった人が来ています。ひとり暮らしや2人世帯の人に催しに参加してもらうことが課題です。自分の状態に気づいて病院に行くことができるのはいい形です。

委員長：発信し続けるしかないですね。

河村委員：何かの機会に気づいてくださればうれしいです。

委員長：アンケートに「周囲の人に助けを求めることが恥ずかしくないことが大事」というところがありますが、家族のことは家族でという意識があるのでしょうか。

河村委員：今話した地域は狭くて古くからの住民が多く、ご近所が助け合っている地域ですが、それでも自分から踏み出せない状況です。ひどくなると治療ということになるかもしれませんが、本人は自分でやるからいいと言っていて、奥さんはこれ以上主人に危害を加えられてもいけないから警察に言えないとおっしゃるらしく、ひとつ踏み出せば解決できそうなところですが、難しいです。

宮部委員：自殺を考えた原因で仕事が多いと答えたのは、20代と50代ということで、20代は就職して間もない、もしくは少し勤めて慣れない段階で緊張もあったと考えられますし、50代はある程度中間管理職の立場になってきて、そこでのいろいろな悩みがあるのかなということで、実態がアンケート結果としても出たと思いました。75ページの今後必要になる自殺対策で、二番目に高いのが「様々な悩みに対応した相談窓口を設置」で、窓口設置も大事だが、「様々な悩みに対応」がどの程度なのか、そこにきちんと相談してもらえるかどうかも考えて対応すべきだろうと思いました。

委員長：窓口をどう伝えていくかも大事ですし、そこへのアプローチのしやすさも大事です。仕事という点では長谷川委員どうでしょうか。

長谷川委員：相談機関の設置について、現在もいろんな相談機関があるが、7割が知らないというところが多いのと、相談しない理由で「相談しても解決しないから」が多く、やはり相談機関や人に相談することの壁があるのかなと思います。まず、そこから解決していくことが大事かなとアンケート結果をみて思いました。

委員長：米井委員はいかがでしょう。

米井委員：人に相談することの壁や、相談機関の認知度が低いことについては、それぞれ年代によって相談に使いやすいツールがあるかなと思います。若い子だと、ツイッターやSNS、スマホでやり取りする方法が得意かもしれないし、ひとり暮らしの高齢者だと、ヘルパーさんが家に来た時に世間話などをしながら悩みを聞いてもらう流れができるかもしれません。また、働いている世代なら、例えば50人以上の企業はストレスチェックが義務化されていますから、そこから産業医につながる流れがあると思います。それぞれの年代や立場で使いやすいツールや窓口を設置して、その上でこういうところがあるというPRが大切です。43ページの「自殺の危機にある人は、何らかのサインを発している」に、70.4%の人が「そう思う」と回答しているので、自殺の危機にある人は何かのサインを出しているということ自体は、多くの人は知っているのだと思います。ただ、知ってはいても、自分がどうキャッチするのかが分からないので、キャッチの仕方を周知していくといいと思います。実際の対応として、話をじっくり聞くとか傾聴することが適切という回答をされた人がたくさんいらっしゃいますが、自分がそれをやるとなったときに、しり込みしてしまう場合もあるのではないかと思います。

います。だから、そんなに重いことではなくまず話を聞く、市民の皆さんがそういう意識を持てるような啓発やPRをできるといいと思います。

委員長：王子田委員はいかがですか。

王子田委員：自殺への関心が高く、対策の必要性も感じているのに、相談機関の認知度が低く、私も市の保健センターでこころの健康相談をやっていますが、認知度が2割くらいしかないということに驚いています。一日に最大3人受け入れられますが、実際に相談にみえる人が一日3人いる日もあるので、認知が広まっているのかと実感していたのですが、数字とのギャップがあり、意外と知られていないのだと改めて思いました。あとは、こころの健康ということで、専門的な医療機関にはかかりにくい場合に気軽に相談できるということ、もう少しPRした方がいいと思いましたし、自分で助けを求められない人への対応がすごく大事ななと思いました。

委員長：高御堂委員はいかがですか。

高御堂委員：それぞれの項目で、男女や年齢層の違いがすごく出ているところがあるので、それを受けた上で、こういう考え方が多い層だから、こういうアピールやこういう対策を取るという手法も必要だと感じました。子どもたちの様子を見てみると、悩みの一番は友人関係、そして勉強ができない、次に家庭の問題かと思います。今、スクールカウンセラーも週に一度なので、なかなか時間的にたくさん子ども関われないということもあるが、子どもが直接スクールカウンセラーと面談するよりも、保護者が子育てのことや家庭でのことをカウンセラーに相談するケースのほうが多いです。もっと生徒自身の悩みをこちらが上手にとらえて、カウンセラーにカウンセリングしてもらえるといいと思うが、なかなかそうはいきません。もう少し身近な相談員も市で雇っていただいているので、子どもは簡単に話ができる相談員を頼っていることもあります。日ごろから定期的にアンケートを取り、養護教諭を中心にこころのチェックなどをしていますので、そういうところで子供たちのこころの動きを把握できればいいと思います。ただ、校長の立場からいうと、子どもだけではなく、職員のほうを自分なりにチェックしないといけないかなと思います。世間では9月1日が若い世代の自殺者が多いといわれていますが、岩倉市内では、無事新しい学期を迎えられて二学期がスタートしていることにほっとしているところです。

委員長：ほかにご意見はありますか。いただいた意見を計画に反映できればと思っています。

事務局：資料4の自殺の現状について手短にご説明します。

※ 資料に基づき事務局説明

●委員：図表4の27年は、図表2と比べると、6人にならないといけなくはないでしょうか。

事務局：ご指摘の通りですが、厚労省と警察のデータを使っていて、厚労省は人口動態統計という死亡診断書からのデータですが、警察のデータはまた違うので、ずれが出ます。

委員長：議題2に移ります。

(2) 計画の承認について

【資料5】「岩倉市自殺対策計画」の骨子（案）

※ 資料に基づき事務局説明

委員長：第2章の2「こころの健康に関する市民意識調査にみる自殺の現状」だとちょっときつすぎるので、「岩倉市の現状」のようだといいかなと思います。

櫻井委員：「自殺の」とつけるときついから「現状」だけにしたらどうでしょうか。

事務局：ここは、「各アンケート・ヒアリングからみられる現状」といったように変えさせていただこうと思います。

委員長：結果をまとめた2章をふまえて3章、4章の具体的な取り組みにつなげていく構成にさせていただきます。

櫻井委員：資料3の2ページ、悩みやストレスの相談の「自殺念慮のあった人は直接相談したいと思う人が少ない」ということでよろしいですか。前は相談したいと思っている人が多いということだったと思いますが。

事務局：相対的に自殺念慮があった人となかった人を見たときに、どちらかというとなった人は専門的なところへ相談したい思いが強いという意味なので、書き方を変えます。対面による相談を望まないということではなく、相対的な問題で、対面の相談も望むけれども、あった人はそれだけじゃなく、SNSも含めていろんなところに助けを求めているということです。

3. その他

事務局：次回の予定は未定ですが、来年1月ごろを予定しています。近くなったら通知をお送りしますので、ご参加をお願い致します。

委員長：計画素案を委員会で検討し、パブリックコメントの流れになるので、よろしくお願い致します。これで会議を終了します。

以 上